

ゴルフの原点に返れ！

ツアー選手に期待したい プロとしての社会貢献

日本ゴルフツアー機構会長 小泉 直

自主的に救済・支援活動に乗り出した
プロ選手たちの思いやりと感謝の心

三月十一日の震災後、日本のプロゴルファーたちの意識が大きく変わったことを感じました。男子プロも女子プロも、それぞれが自主的に被災地支援の義援金を拠出し、募金活動にも積極的に参加しています。男子ゴルフの昨年の賞金王、金庚泰（韓国）は、放射能の影響で来日を危惧する声もあった三月末、日本ゴルフツアー機構に義援金一〇〇〇万円を届けるためにわざわざ日帰りで来日しました。

石川遼選手が今シーズンの獲得賞金を全額義援金に当てると公表したとき、一部のマスコミは「まだ獲得してもいない賞金を寄付する発想はどうか」と評しましたが、私は被災者・被災地を支援したいという彼らの決断や行動に、人間的な成長を感じました。

多くのツアープロが何らかの形で被災地支援をしたいと言っています。ゴルフができることを有り難いと思ひ、そういう場をつくってくれたスポンサーやファンに感謝し、恩返しをしたいという心からの思いが素直に出てきたことを大変心強く思います。

ゴルフ界を支えているのは、一にスポンサー、二にファン、三にプロの選手です。かつては、自惚れて傍若無人の振る舞いをするツアープロ

もいましたが、今のプロたちはスポンサーやファンあつてのトーナメントだということをよく知っていて、サービスピ精神を大切にしています。

ゴルフ場もプレーヤーも多いが
ゴルフ文化はまだ育っていない

昨年設立された超党派による「スポーツゴルフ確立のための議員連盟」（衛藤征士郎名誉会長、山岡賢次会長）の主たる目的は、スポーツゴルフの確立やゴルフマナーの向上、世界に誇れるプレーヤーの育成、ゴルフ場利用税の撤廃、実情に合わない国家公務員倫理規定のゴルフ規定の修正などです。

オリンピックでもゴルフが正式競技に認められる時代だというのに、一二〇〇円のゴルフ場利用税があるのは日本だけです。わが国はゴルフ場もゴルフ人口も多いけれど、まだゴルフは文化としての市民権を得ていないのです。

三年ほど前、ビジネスから引退して学生ゴルフ連盟の役員をしていた私が、ツアープロの団体トップに招聘され引き受けたのは、プロ選手たちが日本のツアーを世界に通じる舞台にした、ゴルフを文化として認知してほしいと願っているからです。

そのために欠かせないのが彼ら自身の意識改革ですから、私も気付いたこと、思ったことをズバズバ言うようにしています。たとえばジ・



こいずみ・ただし / 1939年東京都生まれ。61年立教大学卒業。トヨタ自動車販売入社。営業本部長を経て日本高速通信（現KDDI）常務、ネットトヨタ東京専務、トヨタオートモールクリエイティブ社長、ベルフラワーCC社長を経て、2006年日本学生ゴルフ連盟理事に就任。08年3月から現職。立教高野球部2年時にセンバツ出場。立教大学ではゴルフ部副主将。現在ハンディキャップ4（我孫子ゴルフ倶楽部）。

オープン（全英オープン）に招待されているが参加しなかった選手にはこんな注意をしたことがあります。

日本では結婚式に招待されて欠席する場合、返信ハガキに欠席と書いて出すだけで済むかもしれないが、ヨーロッパでは丁寧なお断りの手紙を出すのが社会的なルールである。参加できない理由、またご招待に感謝する心をきちんと伝えることが社会的な規範として確立されている。君がそうした努力を怠ったならば、今後日本選手の参加枠が減らされることだってあり得るんだぞ、と。

ゴルフはルールがあるだけで審判員のいない、個人の判断や行動に重きを置く紳士のスポーツです。だからマナーやエチケットを重視し、大切にしているのです。ところが、そうした基本ができていないプロ選手も少なくありません。

ん。そこでオフシーズンには、挨拶や言葉遣い、服装や応対など、基本から勉強し直す二日間の研修を実施しています。挨拶すらできないようではツアープロとして世間に出すわけにはいきません。スポンサーやファンに好意を持つてもらえてこそ成り立っているのがトーナメントだということ徹底して教えます。

「ゴルフも「アジアの時代」 将来に向けて発想の転換を」

ゴルフは七人制ラグビーとともに正式なオリンピック種目に決まり、IOCのジャック・ロゲ会長も「両種目を祝福すると共に、二〇一六年（リオデジャネイロ）と二〇二〇年大会における素晴らしい競技を期待する」とコメントしています。もはやゴルフは国境や人種を問わないワンワールドのスポーツです。

また、マーケティングも欧米からアジアへと軸足が移りつつあります。実際にアメリカのツアーでも日本のツアーでも韓国の選手が大活躍をしていますし、そこにはいずれ中国選手も加わってきます。昆明のスポーツ施設には全中国から優秀なアスリートが集められ、ふるいにかければ、選抜されたゴルフ選手がティーチングプロから特訓を受けています。二〇一六年のり

オのオリンピックには相当強い選手が出てくるでしょうし、ツアープロの世界でも中国選手の活躍が現実のものとなるはずですよ。

毎年、マスターズ・トーナメントに合わせて世界のゴルフ団体のチェアマンによるフェデレーション会議が行われますが、とくに最近ではアジア市場の成長性が注目されていますから、近い将来には米ツアーやプレジデントカップ（世界選抜対米国選抜の対抗戦）も日本で開催されるようになるでしょう。

そうした変化に即して、ツアープロはもちろんのこと日本のゴルフ関係者は、将来を見据えてゴルフ界のあり方を変えていかなければなりません。発想の転換が必要です。過去の成功体験にしがみついていたのでは、ワンワールド化の流れから押し出されてしまいます。日本だけを見るのではなく、アジア全体を見て、広く世界と交流しながら共に成長していくために何をすべきか、将来どうあるべきかという視点から考えるべきときだと思えます。

現在、男子ツアーの試合は景気の影響を受けて、ピーク時より一三少ない二五試合です。試合数を増やすことも大事ですが、それにも増して大切なことは試合の質を高めること、プロ選手の人的資質を高めることです。それなくして日本のゴルフ界の進化・発展はあり得ないでしょう。